

平成30年4月24日(火)

老球の細道407号

世界基準なくして、技術・組織力はあるのか

会津バスケットボール協会 室井 富仁

サッカーワールドカップが目前に迫っているのに、サッカー日本代表監督がハリル・ホジッチ氏から西野朗氏に変更になった。前監督のハリルホジッチ氏が重視した球際の強さや1:1の強さではなく、技術や組織力を生かしながら、日本人選手たちがやれる部分でロシア・ワールドカップを戦うという方針転換を打ち出した。

「ハリル・ホジッチ氏は強さ、速さ、推進力を求めた。世界基準を知った上で高度な要求をしていたが、なかなか追いつかなかった。ないものを求めるよりも、積み上げてきたサッカーを良くしていく。そこで勝負していく方が早いかもしれない」(西野新監督)

球技スポーツはコーチナビリティ(コーチの影響力)が大きいと言われ、監督やヘッドコーチしだいで同じチームであっても、コーチの採用する戦略、戦術、メンバーでまるで違ったケミストリーを起こす。しかし、世界基準を目指した2年間と違った、日本代表お決まりの「個より組織力」「体力より技術」で世界に対抗できるのだろうか。

サッカーと同じようなことは日本のバスケットボールにもある。かつて「日本のオリジナルバスケットボール」と言って、「スピード」「アウトサイドシュート」「組織力」を重視してチーム創りをしてきたが、結局、日本よりも外国の方がスピードがあり、外のシュートも正確、チームプレイも豊富という現実に対応できなかった。だから今ではジュニアの世代から世界基準の「1:1の個の力」の強化を推進させている。

日本独自はわかるが、まずは世界基準を追及してからではないだろうか。「上手い」⇒「速い」⇒「強い」⇒「賢い」そして最後に「ムロイ」(個性を出す)という順で技術や戦術は進展していくのだろう。

かつてミュンヘンオリンピック(1972)で男子バレーボールで金メダルを取った日本代表監督の松平康隆氏は自著『チームワーク』で次のようなことを言っている。

「負けないためのチーム創りの計画は①自分の競争相手が持っているものは全部持て
②相手が持ってなくて、自分だけが持っているものを持て」

①については、高さで外国に負けていたので、日本中から190cmを越える大男を探し出してきて、その大男たちにアクロバティック体操を徹底的にやらせ、倒立、バク転、空中転回などが平気のできる忍者にした。②については、松平監督が当時世界では最先端のコンビバレーを創り出した。組織力を活かして世界を席卷した。

日本には日本のバスケットとか、福島には福島の、会津には会津のと言う人がいるが、あくまでもトップレベルを目指すには、自分たちの個性や特色よりも、まずそのレベルの標準を身につけてからの話ではないだろうか。

「パワーを求めても日本人は体格的にできないところもある。日本人選手たちのDNAの中で、やれる部分というものはもっとあるし、別の角度から対応したい」(西野新監督)

日本陸上競技でも100Mで9秒を出す選手が出現している、短距離リレーでもジャマイカを破る結果を出している。そして色々なスポーツではハーフ選手が台頭している。「日本人選手は体格的に無理だ。パワーで劣る」ということを長い間言われてきたが、今後、徐々に都市伝説となるのではないだろうか。